

森隆夫先生へ お別れの言葉

7月7日に先生が御逝去されたとの報に接したとき、耳を疑いました。私たちは動揺し、ショックを隠せませんでした。今年に入って体調が思わしくなく、日本教育文化研究所の所長を辞する旨の御連絡をいただいておりますが、こんなにも早くお別れの時を迎えることになろうとは夢にも思いませんでした。

私は本年度、教文研理事長に就任しました。所長と理事長の立場で日本の教育や教文研の活動についてお話をすることを楽しみにしておりました。それが叶わぬまま、先生は逝かれてしまいました。理事長としての最初の挨拶を、告別式の棺の中でねむっておられる先生にしなければならないなんて、御回復を待って改めてと思っていたことが悔やまれてなりません。最後まで礼を欠いた振る舞いを、どうか許してください。

森隆夫先生は、日本教育文化研究所の所長を4期8年に亘って務められました。教文研の教育問題審議委員会では平成13年度から委員に加わっていただきましたので、丸15年間の教文研との関わりです。これまで、教育問題審議委員会、教育問題審議委員会研究部会とその研究成果としてのブックレット作成、教育シンポジウムでのコーディネーター、機関誌等の執筆等、教文研所長として、教問審委員として、そして我が国有数の有識者として、日本の教育の発展と「美しい日本人の心を育てる」という私たちの理念の伸展に情熱を持って御尽力され、教文研、全日教連活動の充実に絶大な貢献をしていただきました。まさに時代を駆け抜けた80年余の御功績は、日本の宝であると言えるでしょう。

教文研、全日教連の会員は皆、会議や行事に参加して森先生のお話をお聞きするのを毎回楽しみにしておりました。「また、余計なことを言ってしまいました」と幾度となく脱線しながらも、議論を巧みにコントロールし、聞く者を引き付け満足させる誰にも真似のできない魅力が、先生のお話にはありました。話題の引き出しの多さに誰もが目を見張りました。穏やかな話し振りの中に熱い思いが垣間見え、説得力のある理論構築に誰もが納得しました。教育への志の高い者はみんな先生のファンになりました。

私と先生の最初の出会いは3年前でした。全日教連事務局に東京専従次長として着任した平成23年4月のことです。池袋の入母屋という店で4月4日歓迎会があり、たまたま森所長の隣に座りました。偉い方だとはお聞きしていたものの、何も知らない私は「頭の良いお年寄り」という失礼極まりない姿勢で不必要に肩肘を張っておりました。一通りの自己紹介の後、先生の方から「学習指導要領は読んでらっしゃいますか？」と声をかけていただきました。読んでいないわけではなかったのですが、何だか自分が試されているようで反発心を覚え、「読んでい

ません」と即答したのを覚えています。そのとき先生は、「そうですか」と微笑まれ、私の気持ちを察したのか話題を変えて他の方とお話をされていました。その時はさぞかし不快な思いをされたことでしょう。しかし、それから事務局でお話しする度に優しく接していただき、勉強をさせていただくにつれ、森先生の人間性や魅力に触れて自分の器の小ささに気付き、無礼な振る舞いをした最初の出会いをずっとずっと後悔しておりました。

若輩の私が言うのはおこがましい限りですが、先生は本当にチャーミングでかわいい方だと思っていました。圧倒的な知識の豊富さや数々の実績をひけらかすことなく、本当に自然体で、ユーモアとウィットに富み、常に話にひねりを加えなければ気が済まないところは、子供っぽく無邪気でもあり、一方で人間としての器の大きさを感じさせていただきました。私は安心感と信頼感を覚え、そんな森先生にみんなが惹かれました。

ずっとずっと先生のお話が聞けるものと思っていました。

しかし、お別れは突然やってきました。先生に対して無礼であり続けた私が、最後に申し上げます。七夕の日に逝かれるなんて、何だかロマンチストの森先生らしいですね。

7月10日の告別式を終え、森隆夫先生は台風8号の嵐とともに旅立って行かれました。今日の東京は、本当に爽やかに晴れ渡っています。この抜けるような青空の如く、どうか穏やかに、安らかにお休みください。これからも天上より日本の教育の行く末と、日本教育文化研究所、全日本教職員連盟の発展をお見守りください。

本当に長い間、お疲れ様でした。

言葉にならない溢れる感謝を込めて。

合掌

平成26年7月11日

日本教育文化研究所理事長
全日本教職員連盟委員長 岩野 伸哉